

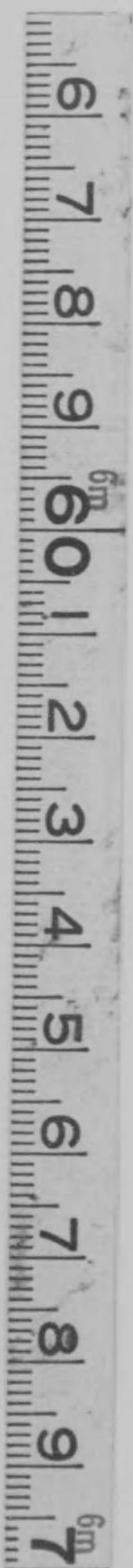
353  
16

日 本 民 族  
研 究 叢 書  
(1)

木 村 鷹 太 郎 著

日本民族の起原地はウラル、高加索、バルカン地方と確定した以上は、是から流れ出る日本民族と其歴史とは、此地點から、地理的順序を以つて發展する筈。學界の鎖國主義、極東隔離の獨り善がりの舊派日本學は、此一篇で基礎から轉覆されたもの。國學の革命、國史の改造は、避くべからざる運命である。

# 天地開闢と高天原



# 始





# 天地開闢と高天原 目次

總論 高天原の觀念……………一

一 天地開闢説の世界的比較研究……………六

二 比較結果——其等の歸一……………九

三 開闢地理の研究着眼……………一二

四 日本古典の開闢の神々……………一三

五 別天神五代——ウラル、高加索……………一四

六 佛典須彌山の北は高御産靈神・神産靈神……………一七

七 佛典の三十三天——盡く世界國名……………一八

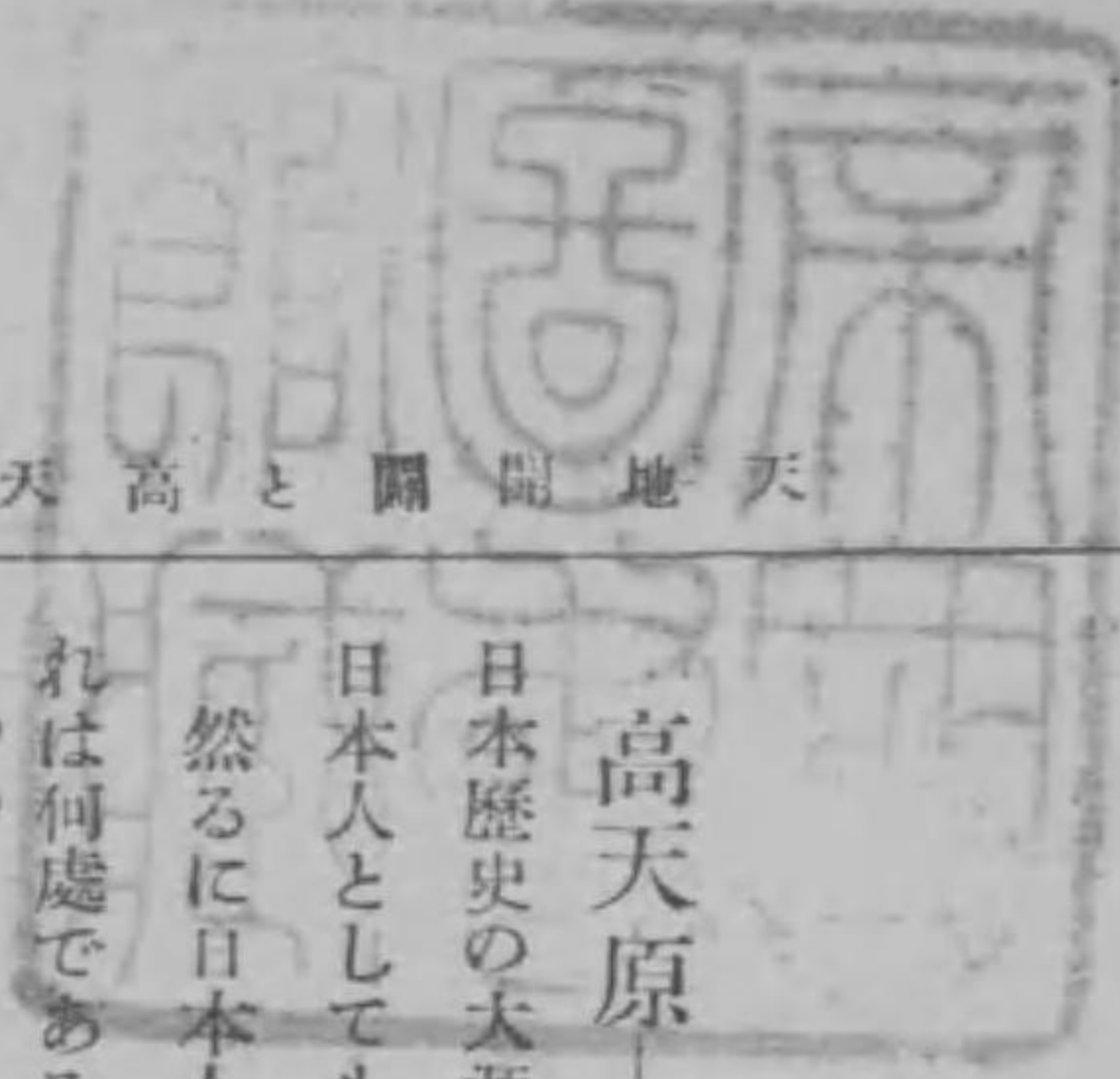
八 神世七代と黒海四周の古代國名……………二四

九 神世「七代」と舊約書の創世「七日」との比較……………三三

十 莊子の「渾沌氏の顔」の「七竅」神話、及び結論……………六六

研究餘録——小生の研究日誌……………四三

353-16



## 天地開闢と高天原

木村鷹太郎

### 總論 高天原の觀念

高天原——日本民族の歴史が、天地開闢記事と、神々の居所であるとの高天原記事とに始つて居る以上、日本歴史の太源泉に溯らうとする歴史家は、必ず先づ開闢と高天原との研究をせねばならぬ事である。又た我々日本人としても、大祖先の居つた土地及び我民族の發祥地を知らねばならぬは當然である。

然るに日本人は天地開闢記も高天原の記録も之を持つて居りながら、其れは如何なる性質のものであるか、それは何處であるかを知つて居る者が無いと云ふに至つては、民族としては甚だ冷淡であり、學者としては如何にも無能と云はねばならぬ。然し、解からぬからと云ふて、何時までも研究せずには放棄して置く權利は日本の歴史家には無いのである。苟も日本の歴史家と名乗る以上は、解かるまでは飽くまでも之を研究して日本歴史を完全にするの義務がある。且つ若し今のまゝに高天原の何處であるかを不明にして置く時は、宛も人形作りが、頭の無い人形を作つて「我は見事な人形作者である、「頭の無い日本帝國史」と云ふ人形を作つたぞ」と威張るやうなもので、作者の醜態は被作物の醜態よりも一層の醜態で、之れが日本舊史學の狀態である。

然し高天原及び神代の事は、到底知ることが出来ぬであらうか。舊派史學者流の俗惡なる國史家等は、「神代選





たり今得て考ふ可からず」などの囁語を言ふて居るが、是れは彼等、或は彼等の時代の學力が足らなかつたからである。今ま若し知識を世界に求めて、其光明に由て國史を研究する時は、神代も極めて明瞭、高天原の所在地も最も精銳な針の尖を以つて、正確に地圖上の地點を指し示めることが出来るのである——然らば高天原は何處であるか？ 高天原に就ては、嘗て研究叢書第二編に論じた事があるが、今又た多少の訂正と、新たな研究方面と嚴正な斷案とを以つて、此に再び論じて、高天原なるものを明確にしようと思ふ。

**コスモゴニイの天**——高天原は何處であるか。其何處であるかを研究する前に、高天原或は天に關する古典の觀念如何を概観して置く必要がある。日本古典は天地開闢から日本歴史を説き始めて居る。日本書紀は全然オルフェウス（開闢を意味す）的であつて、其説く所に據れば「天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌たること鷄子の如く、溟滓りて牙を含めり。其清陽なるものは薄靡きて天となり、重濁なるものは淹滯きて地となる。……故に天先づ成つて地定る」と云ふて居る。支那の三五略記、淮南子、希臘にはオルフェウ等も同一のことを言ふて居つて、少しも異はぬ。意ふに同一起源の學説が東西に分れ傳はつたもので、日本が支那から得た觀念でも何でもない、日本も始めから此傳説は有つて居たものである。

此説に據る時は始めの渾沌の一原が上下に別れて天となり地となつて、天は清く軽いものから成つて上に昇り其高い所の位置を天と謂ひ、其處に開闢原始の神々が住んで居るものとしてある。天は先づ出來たが、地は未だ固まらぬ。そこで天上の原始の神々が、伊邪那伎、伊邪那美二神に命じて其深ふて居る國土を修理固定せしめ給ふた。二神は天から游能基呂島に降つて、其處で國を生み、神を生み、最後に三柱の貴い神を生み給ふた。其三柱の神の内、天照大御神は女神であつて、光彩華麗日のやうであつたに由つて、

伊邪那伎命は大に喜んで、之を天に昇して天の君主と定め給ふた。此時には、まだ「天地相去ること遠く無かつた故に天の柱を以つて天照大御神を天上に上げませり」と日本書紀には云ふてある。之に由つて見る時は、天地は是から後に、次第に上下に割れて相遠ざかつたとするもので、只だ漠然と天は高い所であるとの思想に過ぎぬ。又天は、單に非常に高い所のみに限らず、普通の空中の高い所も天であるかのやうな觀念もある。假令へば、神の大宮を建築する時に「底つ磐根に宮柱太敷き、高天原に氷木高知り云々」と言ふが如きは普通の高い空中も高天原であるやうに思はれる。

要するに古典の宇宙學から謂ふ時は、清き輕きものは天の實質であつて、其位置は高い所であり、高い所は貴い所であつて、神々の住み玉ふ所となつて居る。

然るに又た一方の觀念に據ると、天と下界との間には一種の境界、即ち我々の家に於ける天井のやうなものが高い空に在つて、或は穹窿とも謂ふべきものを形作つて居つて、神々の世界と人間の世界とを限つて居るとの考もある。故に天若彦が出雲に在つて、天から使はされた雉子名鳴女を下から射上げて、其矢が雉子の胸を突抜き、尚ほ上の方高く天の穹窿の底を射抜いて、高天原に至り、其穹窿に矢の穴を明けたとことがある。

**天の觀念の進化**——然るに此單純な天の觀念は次第に變化して、天照大御神が「天」を治らしめし、須佐之男命との國境關係が起ることになつてから後は、是まで宇宙的であつた天は、今や地理的の天となつて所謂天にも天の香山なる山もあり、天の安川なる川もあり、石もあり、鐵もあり、銀冶もあれば刀劍類もあり、鏡もあり、玉もあり、眞賢木もあり、小竹葉もあり、馬もあり、鹿もあり、鳥もあり、機織もあり、田もあり、畑もあり、溝もあり、樋もあり、從つて米の有つたことも明瞭であり——其所には人間生活と同様な神々の生活も



あり、種々の歴史も有つて、何等人間世界と異なる所なく、決して、宇宙開闢記中に謂ふてあるやうな「清き輕いものが天となり、濁つた重いものが地となつた」と云ふ有様ではなくて、濁つた重い土も鐵も有つて、天は宛然地上に降つて、或る固有名詞を以つて記されて居る土地——(地球上、地理上明瞭に)或一地域を成して居る如き有様であることは古事記、日本書紀の明瞭に記して居る所である。

されば只だ宇宙的に或は宗教的に、天は高い所である、神秘の所であると言ひ去る時は、又た何等研究すべきところは無いが、一方又た天に關して地理的の記載ある點から考へる時は、天には(一)宇宙學的、宗教的の天と(二)地理上の天との二つあつて、常識を以てするも、吾等は地上の天、即ち地理的に高天原なるものゝ存在を考へずに居る譯には決して行かぬ。況や學者たり、歴史家たり、歴史地理學者と名乗る者に於てをやである。

**地理的の天**——所が從來の史學家中、果して學術的に、系統的に、地理的に高天原を研究した者が有るか、吾等は不幸にして其人あるを知らぬ——一人もない。大抵は高天原とは神秘で、知ることの出来ぬ、一種宗教的、空想的の土地であるとして、一向に研究して居らぬ。あゝ是れが日本歴史が頭の無い人形のやうな怪物となつた所以であり、又た従つて歴史研究家に頭——頭腦が無いことを證明することゝなる。

**舊派史學と國辱**——舊弊固陋の國學者や、神主連はいざ知らず、苟も學術的歴史家と名乗る者に在つては、高天原は單に高い所であり、神秘で知ると出来ぬ所であると言去るわけには行かぬ。其所で遇々或種の學者は學術的にヤツタ積りで、高天原移動説なる賢けな馬鹿な説を立て、天は始め淡路島の上に有つたが、其後出雲の上に移動し、又た次に大和の上に移動したなど云ふて居る。又或人は天は朝鮮方面を謂ふたものである、或は支那方面を謂ふたものであるなど、朝鮮人か支那人が言ひさうな幼稚な説を爲す者もある。次に近頃の聊か

ばかり新らしがつた連中には、イヤ高天原は南洋を謂ふたものである、故に伊弉那伎、伊弉那美二神は船に乗つて淡路に着かれたのであるなど、何等據り所無い空想説を立てるものもあるが、皆これ井底の管見者流、専門的嚴正の研究をしたことの無い者等の立言に過ぎない。

余は日本の學者に警告を與へる——若し日本の學者が依然井底の痴蛙的研究を爲て居ると、日本研究は今に西洋人にしてやられるぞ。西洋人等の内には、既に日本人は古代のヒット人に似て居るとの説を爲す者もある。シナイ半島から來た人種であるなど、言ふ者もある。あゝ日本の學界の名譽は實に危いことである。石川三四郎君の如きも遙に西洋クンダリから、西洋人の不完全な説を日本まで擔ぎ戻つて、得々と書き立て、居る。素より舊來の國學者や國史家等に比較すると大に進歩して居り、又た我輩の研究法を標竊した部分も多大にあるやうに見えて、當らずと雖遠からずだが、遠からずと雖當らずで、憫れむべくも石川君の西洋人の淺薄なる眞似學説は全然ダメに終つて居る。けれども若し是等西洋人の研究が今一步を進めたなら、日本人の高天原は西洋人に發見せられて、吾等は民族祖先の發祥地は西洋人に學ばねばならぬやうな、日本學界の國辱であつたであらうが、幸に高天原發見者は日本人たる木村鷹太郎で有つたのは何よりの仕合せである。日本天狗

且つ前にも云ふ通り天照大神以後の高天原は、全く地理的の天であることは明瞭であつて、決して神秘不可知のものらしく無いとして、舊派史家のやる通りに、現島國日本の地理を研究するとしても、日本の何處にも古典の記事に合つて居るやうな高天原に當るべき土地は發見されない。然るに世界的知識を以つて新研究を行ふ時には、古典記事と寸分違はぬ高天原は世界地圖上に發見せられ——其處には天の香山も、天の安川も、天の磐戸も、盡く今も現に明瞭に其名が書いてあることが知れる。



高天原と日本古典——高天原に關するとは古事記、日本書紀が最も善く之を傳へて居る。是等の書物は如何にして、又た實の所、何人に由つて書き傳へられたかは之を別論と爲し、兎に角其記載の内容に至つては實に不思議なまでに精密・正確で、一方には世界的言語學及び地理學の知識に照らして是等の古典を研究し、又た他方には日本古典を光明として、新眼地たるアルメニヤ方面を研究する時は、兩々相反照して、彼は我を我は彼を明かにし、相互に對譯通辯して、彼我共に史傳、地理、地名の意義等が明瞭になるのである。其れ故に日本古典は、世界研究には是非とも無くてならぬ書物で、人類の太古を知るに於て、全世界の歴史家の寶典と云ふべきである、そこで我等は——(一)天地開闢から始めて、(二)高天原及び其神々を研究し、以つて日本民族史の出發地點を明瞭に爲ようと思ふ。

### 一 天地開闢說の世界的比較研究

苟も天地開闢と云ふ以上は、日本古典の開闢記も全世界的のものであるべき筈で、決して小さな島國のものとして、特殊のものとしてたりして天地開闢など云ふことは道理が許るさぬ。其れ故に日本に傳はる開闢說も、堂々世界的に研究されねばならぬ。そこで日本古典の偉大なる價值が發揮されるのである。そして研究者の最も愉快を感じることは、文明的諸民族が持ち傳へて居る開闢說は大同小異で、殆ど同一物の別傳たることが知られ其地理も亦同じであるのは、大に我等の立場を堅からしめるのである。今世界諸國の開闢說を擧げて其れから比較研究を行うて見る。

日本及び支那の開闢——日本書紀は次の如く言うて居る——「古、天地未だ割れず、渾沌たること鶏

子の如く、溟滓りて牙を含めり。其清み陽らかなるものは、薄靡きて天となり、重く濁れるものは淹滯きて地となり、精妙なるが合へるは搏き易く、重く濁れるが凝れるは竭り難し。故れ天先づ成りて地後に定まる。然して後神聖其中に生れます」と。是れは舊派の歴史家は支那の書物の三五略記とか、淮南子等の文で、日本は其れを借りて來たものだと言つて居るが、其實是れは世界共通のもので、希臘にも之と同じものがあつて、決して支那特有のものとは謂へぬ。寧ろ日本が世界最古の國として、日本のものを支那等が取つたものと云ふが當然である。舊派の史家は不見識だから困る。

日本書紀は又た言うて居る——「開闢の初め、州境浮び漂よへること、譬へば魚の水の上に浮び遊べる如し。其時天地の中に一物生れり。狀葦牙の如し、便ち化して神となる。國常立尊と號す」と。

古事記……は「天地初發の時、高天原に成りませる神は天の御中主神、次に高御產巢日神、神產巢日神……次に國稚くして浮脂の如くにして、海月なす漂よへる時に、葦牙のごと、萌え勝れる物に因りて成りませる神の名は宇麻志・阿斯詞備・比古遲神……天之常立神、國之常立神、面足神、檜根神、伊邪那伎神、伊邪那美神……」と云ふて居る。

希臘の開闢說——希臘の開闢說にはオルフェウスのそれとヘシオドスの其れとがある。オルフェウスの開闢說は——「始めに無始の時なるものが在つて、其れから渾沌なるものが生じ、其れの中に夜と、霧と、火のやうな精氣が生じ、時は火の如き精氣を中心として霧を回轉して鷄子の如きものと爲し、其急激の回轉に由つて二つに割判れて、一は天となり他は地となり、其中心から愛なる神を生じた」と云ふて居る。

ヘシオドスの開闢說に據ると——始めに渾沌なるものがあり、次に廣い所のガヤ即ち地が出来、次に最も美し



イロなる神が出来た。此イロの神の力で男女兩性を結び付けて子孫を生ますやうになつた。そして渾沌から生れたものは地の下の暗黒たるエレボスの陰府と、地上の暗黒たる夜とである。夜とエレボスが合つて天の光たエイテルと、地の光たる晝との二人が出来た。最後にイロは、母なる地ガヤに觸れて、燦爛と星きらめく天たるウラノスと、高山と、大海とを生んだ。此うしてウラノスとガヤ、即ち天と地とは宇宙最初の支配者であり、又た祖先になつた」と。

リグ・エダの開闢説——リグ・エダ第十マングラに世界の大原たる「ブラフマン」即ち梵と、其發展とを云うて——「天地の、開けぬ前は渾沌と、有るものもなく無きもなく、仰ぎ眺めん空もなし。抑も充ち満ちし天地を、つゝみしものは何ものぞ、充たしものは何ものぞ。底ひも知れぬ眞黒なる。水の内にやつまれし。こゝには死もなく不死もなく、日もなく夜もなく闇もなく、たゞ彼れ獨り其身には、萬のものを備へつゝ、いと寂やかに音もせず、息をすひ又た吐けるのみ。彼れの外には有るもなく、上も有るなく、下もなく、又た彼方もあらずき。初め來りし其ものは、暗きに隠れし暗きにて、闇の中なる闇にこそ。次には水と皆なりて、あやめも判かすうば玉の、たゞ渾沌と彼れ一人、無につままれて在りにける。此かりし程に彼はしも、身を回らして己が身の、内なる方を見かへりつゝ、身にそなへ有つ烈しかる、燃ゆるが如き勢の、自發力もて欲望を、心の内に作りける。此欲望は萬物を作り出だせる芽ばえにて、知慧を求むる人々は、有無のけじめの始まれる、不思議のきづなと呼べるなり」(木村譯)と。

猶太教の開闢説——創世記首章に「元始に神天地を創造り玉へり地は定形なく、曠空くして黑暗淵の面にあり、神の靈水の面を覆ひたりき。神光あれと言ひ玉ひければ光あり(以下略す)と。

北人の神話「エツダ」の開闢説——「エツダ」の言ふ所に據ると「始めは天なく、地なく、只だ底もない大海、と霞のやうな世界があるばかり。其れから霜の巨人ヒミルと、アウドムブラ(乳汁)と云ふ牝牛が生れ、霜の巨人は牝牛の乳を飲んで居り、牝牛は霜と氷とから取つた鹽を舐めて居た。一日牝牛は鹽の塊を舐めて居たら、中から人間の髪が現はれ、次の日は頭が完全に現はれ、又次の日は快活な力強い體が現はれて來た。此者は神である。其れから神々や人々が生れた」(太古に大きな秦皮樹があつて、其ニツフルハイムの國に當る根には暗黒と云ふ毒蛇が居る)と。

## 二 比較研究の結果——其等の歸一

右諸國民の開闢傳説を通讀して見ると、其等は大概類似して居ることは直感される。其始めに

渾沌——を謂ふは日本書紀も、希臘のオルフェウスも、リグ・エダも、舊約書も共通で、古事記では「海月なす漂へる國」と云ひ、舊約書は「地は定形なく黒淵の表にあり」と云ひ、エツダは「天なく、地なく、たゞ底のない大海と霞のやうな世界」と言ふて居る。

鶏子——其原始の一物が鶏の玉子のやうであつて、其れが分れて天地となり、神が生れたとのことは、日本書紀もオルフェウスも同じである。

欲望と精氣——其の玉子の割判れるに、日本書紀は「軽いものと重いものとが上下に別れた」と云ひ、オルフェウスは「火の如き精氣を中心として……其急激の回轉に由つて、卵は二つに別れた」と云ひ、リグ・エダは「身に備へ有つ燃ゆるが如き勢の自發力もて欲望を作り、其れから有無の區別が出来た」と云うて居る。



暗黒淵——古事記は、始め土地が、水の上に漂うて居たと云うて、こゝに大きな、海があることを云うて居る。リグ・エダは「底ひも知れぬ眞黒なる、水の内にや包まれし」と云ひ、舊約書は地は「**暗黒淵**」の面にあつたと云ひ、エツダは「底もない大海」と云ひ又た「暗黒と云ふ毒蛇」を言ふて居て、凡ての傳説に黒い海の觀念が共通してある。

天御中主神、ウラノス、梵、アフラ・マツダ——古事記には宇宙の最も初めの、又た其中心たる天御中主神がある。リグ・エダにはブラフマン(梵)と云ふ中心の神がある。希臘の神々の大祖にウラノスがある。是等中心的、本原的の神の觀念は諸傳説に共通して居て、同一の神であらうとの考へは直ぐに起きる。ゼンド、アエスタのアフラ・マツダも同じ神で、日本には其れを大元尊神として「葦屋道滿・大内鑑」と云ふ竹田出雲の戯曲に傳はつて居る。

人間の始原——に就いてエツダはアウドムブラと云ふ牝牛の事を謂ひ、其れから神人の生れることを謂うて「始めに人間の髪が現はれ、次の日には頭が完全に現はれ、又次の日は力強い體が現はれた」と云うて居る。これが古事記の始めに神(髪)産靈神、國常立神の後に面足神(顔)、惶根神(頭)、最後に伊邪那岐、伊邪那美神が生れ玉うたと同じことである。

勿論日本ではない——以上は比較の大略であるが、其れに由つて觀ても、是等諸國民が持ち傳へて居る。開闢説は、大同小異を以つて同じもので、古事記や日本書紀の開闢記は、現極東日本島國を中心として、天地開闢があつたものとは、如何にしても考へることは出来ぬ。本居でも平田でも、現在に居たら、決して「アノやうな狭い日本島國中心説は爲さなかつたであらう。けれども、善く考へて見ると、決して希臘でもなく、猶

太でもなく、印度でもない、又た支那でもなく。

人類及び文明の起原地——諸學者の説は必ずしも明瞭に一致しては居らんが、從來人類の起原地と稱せられ居る所は、西部亞細亞裏海の邊と云ふ者もあり、中央亞細亞と云ふ者もあり、又はチグリス河ヨウフラテス河の上流地と云ふ者もあるが、要するに中央亞細亞以西、黒海附近から、小亞細亞、メソポタミヤあたりと云ふ範圍にある。

又た人類文化の起原と傳播とに於ても、決して極東から、又は支那などから西へ行た趣はなく、印度も決してアスリヤ、バビロニヤ等より古い趣はなく、埃及の文明も古くはあるが、決して文化の起原地と云ふ趣も傳説もなく、矢張り、西部亞細亞から、文明は東西南に播まつたと考へられ、又た諸傳説もさうである。

そこで我等は此全體の達觀を導引きとして、假りに開闢傳説地の中心を太古の西部亞細亞、小亞細亞、ウラル以西の土地と前定して、其れに見當を向けて研究に進み、そして其假りに前定とし置いたことを立派に證明したら、其れが正當の研究方法与信ぜられる。

### 三 開闢地理の研究着眼

大元神、鷄子(ウラル)——右に比較した通り天御中主神も、梵も、ウラノスも、皆同じ性質の神で、其名も同じ意味の別譯である。乃ち希臘神話のウラノスは Ouranos で「天心・凡」即ち大、天、梵天、中心天等を意味する。梵は即ち希臘語の Pan「凡」で、梵をブラマと云ふは Brabma, Brahma, Pita で四方に發射する中心、大原を意味し、波斯教のアフラ・マツダ Ahura Mazda, A ura-matuda で「天心・全」を意味し、是等神々の名は皆其意味



に於て同じで、同一の神たることが知られる。

是等世界の大原たる神の名に對して、我等は右に謂うた見當を付けて此地方に、此神の名と同じ山の名を發見するものである。其れは即ちウラル山で、希臘のウラノスの神の名を比較するが、最も共同である事を發見するに手輕である。乃ちウラノスの神は *Ouranos* でウラル山は *Oural* であつて、前半語「ウル」は心又た天を意味し、兩者に通じて同一語であり、後半語「アノス」も「アル」も凡てを意味して、ウラノスの神の名はウラル山に遺つて居ることが知られ、ウラノスと同體異名の神々も亦凡て此ウラル山に其名に存して居ることを知られ——日本古典の天御中主神の名はウラル山にあると言はねばならぬ。又其中心と周圍との觀念とは卵の形容で「鶏子の如し」とは即ち天御中主神のことである。

**黒淵(黒海)**——次に開關諸傳説は皆一樣に海、又は黒い深淵のことを謂うて居る。今若し右の如くウラル山が原始の神の名に考證された以上は、黒い淵や海の記事に對して其山の南の黒海を以つて記事に當てるは決して誤らぬと信する。

**エツダの牝牛(オクソス河)**——北人神話のエツダが、開關の始めアウドムブラと謂ふ牝牛が鹽の塊を甜めて居たとのことを謂ふて居るは、オクソス河即ち牛河(オクソス *oxen* なる語は本は牝牛にも使うた)のことで鹽の塊とは裏海の鹹水湖を謂うたものである尙ほ——

**リグ・エタの記事中**——「仰き眺めん空」とはウラル東西の昔のスキタイ *Skythae* 地方の事で天を眺めるを意味する地名である。又た梵が「自發力もて慾望を、心の内に作りける」なる句はウラル山の西のラルガ河の名になつて居る、ラルガ *Ryga* の「ラル」は羅典語「自發」「慾望」を意味し、「ガ」は「我」「行ふ」を意味する語

で、前述諸傳説の記事は、盡くウラル山や、黒海方面に、地名となつて存在して居る所を見ると、天地開關——人類起原——人文發生地は明かに此地方と斷定せられ——我古典の所謂高天原も亦、此土地であるとの考へは殆ど其足場を得たものであるが、尙ほ次々の研究は前論に證據を重ねつゝ、尙々後論を導いて、終には大組織の大調和を以つて我等の新研究の堅固確實にして、又た偉大なるものであることの了解を與へ、舊來の倭小、狹隘、無學の一切の研究を轉覆破壊して、我等の新研究に嚮はしめることを此に預め斷言して置くものである。

#### 四 日本古典の開關の神々

前に説いた所の世界諸民族の開關傳説の大きなものゝ新研究を基礎として、我古典の所謂高天原及び其神々を研究すると、皆是れウラル山から黒海、小亞細亞、バルカン、南方露西亞、高架索、波斯北部に至る國々、即ち黒海四周の國々の名であることが知られる。其等神々の記載に於ては、古事記と日本書紀とは、精粗と、多少の異同とはあるが、何れにしても神名は地名となつて居るのである。今ま古事記の記する所に據ると——

**別天神**——「天地初發の時、高天原に成りませる神の名は、天御中主神、高皇產靈神、神產靈神——此三柱の神は皆獨り神なりまして隱身にます。

「次に國稚く、浮脂の如くにして、海月なす漂よへる時に、葦牙のごと、萌え騰れる物に因りて成りませる神の名は、宇麻志阿斯備比古邇神、次に天之常立神——此二柱の神も亦獨り神成りまして隱身にます——上の五柱の神は別天つ神。

**神世七代**——次に成りませる神の名は國之常立神、豐雲野神——此二柱の神も亦獨り神成りまして隱身



にます。

「次に成りませる神は宇比地邇神、妹須比智邇神、角代神次に妹活代神、次に意富斗能地神次に妹大斗乃辨神、次に淤母陀琉神次に妹阿夜詞志古泥神、次に伊邪那岐神次に妹伊邪那美神——上の國之常立神より以下伊邪那美神まで、并せて神世七代と稱す。」

と。右は古事記の文であるが、日本書紀には第一に國之常立尊、次に國狹槌尊、次に豐斟淳尊凡て三柱の神の名を擧げて、其他の神々の名は「一書に曰く」の部分に入れてある。そして其等三柱の神々の中、國狹槌尊のみは古事記に出て居らぬ神のやうである。

我等は是等神々の名は、古代の黒海四周の地名人種名になつて居るとの事を前定して置き、先づ其神々から説明して、然る後、此に所謂高天原とは何れ丈けの範圍を謂うたものであるかを明かにするが、正しい順序のやうである。

### 五 別天神五代——ウラル、高加索、スキタイ地方

第一代、天御中主神(ウラル地方)——天地開闢して高天原に先づ成りませる神、天御中主神、高御産靈神、神御産靈神、阿斯詞備比古遲神、天之常立神の五柱を古事記は、別天つ神と云うて居る。思ふに其れは最も原始の神であり、又最も尊貴い神だからであらう。

天地開闢の土地は、前に説いたやうに黒海附近である以上は、我古典の天御中主の神の土地を此方面に求めることは正當の事と信ずる。そして其地方の地圖に何と書いてあるかを讀むが研究上一番正當の方法と思はれる。

地圖はたゞ眺める計りではつまらぬ。讀まねばならぬ。讀んで地名の意味を知らねばならぬ。

ウラル山——亞細亞と歐羅巴との中間にウラル山、ウラル地方がある。——何を意味するか? *Ortal(Ural)*のウラは希臘語「天」と「心」と「中」とを意味し、下半語アルは「大」「凡」「御」等を意味し、ウラルは何の事はない。天御中主を意味し、又た高天原を意味するのである。希臘神話で第一の神をウラノスと云うも亦之と同一の神で、其土地も同一である。印度の梵天も亦是れであることは前に説いた通りである。

第二代、高御産靈神(スキタイ)——天御中主神の次に高御産靈、神産靈の神々が成りました。元來ムスビとは生産の靈で、之に産靈の文字が充て、あるは其當を得て居る。又たこれは物の原因であり、根本であり、又た母藏であつて、西洋でムザ、ムソー、ミューズなど云ふは即ち此産靈のことである。英語でミューズを *Muse* と綴るが、これは *Musa* で羅馬字は片假名ヒと同じもので、産靈は實にミューズである。

前に云うたウラル山から西にかけて一帯の土地を昔はスキチャ又はスキタイと云うたが、是れが即ち高御産靈の土地である。スキタイ *Sky-thian* の前半語 *Sky* は英語のスカイと同じく天、高、空間、又は場所を意味し、後半語 *thian* は希臘語「見る」を意味し、スキタイとは「天見る」「高見」「日高見」「空見つ」等を意味し、高御産靈、又た高皇産靈と書いてある名は、實は「高見産靈」である。

古代地圖では、此スキタイは、西は黒海の西北海岸から、東は中央亞細亞、尙ほ又た飛んで極東の海岸にまで及んで居る。

又た其名稱に「肅み慎む」の意味があると、又たスク・シイン *Sky-thien* の發音があることからして、肅慎とも謂はれて居る。此肅慎の土地は歐亞の中間黒海地方から極東海岸まで及んで居るから、古代史を讀む者は、其心し



て居らねばならぬ。たゞ慎肅と云ふたからとて、舊派史家の如く、決して極東の土地だとばかり考へてはならぬ。日本書紀の欽明天皇紀や齋明天皇紀中の阿倍比羅夫事件の肅慎は、決して今の極東沿海洲あたりでなく、黒海北岸の肅慎であることを此に一言して置く。

此スキタイ又たシキタイのスキタイなる語には色々の意味があつて、空虚、好き(戀)、色(美觀)、識(知恵)、髪などを梳き、櫛けづる等の意味がある。日本では此スキタイを「敷妙」と云うてもある。又た佛教に所謂「虚空藏菩薩」なるものも亦高見産靈のことで、虚空即ちスキの産靈、母藏で、其内「識」の意味がある所から、虚空藏は、知恵を與へるものと云うてあり、又た其「好き」の意味から好き次第の意味があつて、北人神話にはフレヤ即ち「自由」を意味する神の名も出て來ることがある。

### 第三代 神産靈神(ダキヤ)

——黒海の西の方、ダニユープ河流域一帯を、昔はダキヤ(Dacia)と云うたが、これか神産靈神の別名で、又其土地である。神産靈の「神」の語源は希臘語カミ(Kami, Kome, Koma)の上、神髪、頭、美しく飾る、頌めた、へる、榮を與へる、救ふ、回復す、癒やす、導く等を意味し、羅典語源Daceで、「カミ」と同じ意味であり、英語のデコレーションの語幹は是れである。後代此ダキヤ地方にクマニヤ(Kumania Koma)民族の國が出来たが、其語幹はコマ即ちカミと同語で、是地は即ち神産靈神の土地たることが知られる。高御産神と、神産靈の神とは、別名を神漏伎、神漏美と謂うが、從來の國學者等は此名に就いて何等合理的説明を下し得ぬ。是れは希臘語 Kalii-logoi, Kali-ope のことで、前者は美言美觀を意味しスキタイの語と同じで、後者は美容頌讚を意味して「カミ」又は「ダキヤ」と同じ意味である。

### 第四代 阿斯詞備比古遲神(小亞細亞)

——次に宇麻志・阿斯詞備・比古遲神成りました。是かれ次々の角杙神話、活杙神に至るまでの神々は、皆黒海の南、小亞細亞の昔の國名に讀むことが出来る。宇麻志・阿斯詞備比古遲の名を希臘語に譯すると Omnisasi-gate-echos となるので、古代地圖にアシカニヤ、Caria とあるとも對譯になり、又たアルメニヤ Armenia とも對譯になり、「葦の芽の地から發生する」「葦禾」を意味するのである。又其「葦の芽」なる語は別語に譯されし Asia Minor 又は Colo Asia 即ち「小亞細亞」となり、亞細亞の初めであり、芽であり、子であることを意味し、此小亞細亞が世界の始め、亞細亞の始めであることの名を負うて居る。それだから「小亞細亞」とは、亞細亞の大小を表はすのではなく、始め、芽はえを意味するのである。

### 第五代 天之常立神(アマゾン)

——次に成りませる神、天之常立神とは高加索附近のアマゾン國、又たイペリと云う姫氏の國である。アマゾンとは Amazon 即ち天國、山城、天國守護を意味し、「天」「常立」とを意味する。「イペリ」Iberi とは善く保つ、守護する、操を守る、堪え忍ぶ、守り堅める等を意味し、又た姫と譯する。姫とは蓋し「秘め」で、後代天照大御神の國は是れであつて、此大女神はアマゾン女國の大元帥陛下である。

以上五柱の神は別天つ神と言うてあるが、これは最も原始の神で、又た最も親近の神であり、又た最も尊貴の神であること、察せられる。

## 六 佛典須彌山の北は高御産靈、神産靈の神

佛典に須彌山なるものがあつて、世界の中心と謂うてある。舊來の佛教學者等は世界的、比較研の知究力が無



かつたから、須彌山とは空想的の山だと思ひ、よし在るとしても、印度の何所かの山だと思つて居て、一人として其れ以上に研究を進めた者が無いと云ふが如き、佛教學界は實に貧弱を極めて居る。

所が我等の新研究を以て佛典を研究すると、全然舊來のもの趣を異にし、須彌山の如きは、立派に實在して而も其れが印度の山でなく、我等の所謂高天原の山——即ち高加索山で、「須彌」と「高加索」とは對譯である。此事は嘗て論じた事もあり、又た今度も更めて別に論ずることもある積りだから、今は此に其説明は略して置く。大唐西域記の言ふ所に據ると、須彌山の東を毘提訶洲 (Pura Vidaha) と謂ひ、之れは羅典語の Pura Vidahé「清く觀る」「美しく眺める」を意味して、スキ・タイとも、高御産靈とも、神漏伎とも同じ意味の名である。須彌山の西を瞿耶尼 (Gohani) と謂ひ、之れは希臘語の Kyhani と同じ語で、美とし、ほめたゝへることを意味して、神産靈の神——「カミ」や、「ダキヤ」や、神漏美など、同じ意味の名であつて、佛典は神典の傍證を爲し、神典は又たの佛典研究革命を促がすのである。

### 七 佛典の三十三天——盡く世界國名

三十三天——今茲に佛典に説いて居る諸天に新研究を加へて、我古典の所謂高天原即ち「天」なるもの、研究の參考に供せようと思ふ。

佛經には、欲界の六天、色界の十八天、無色界の九天、合計三十三天を謂うて居るが、今茲に新研究を行つて見ると、其所謂天とは高加索山以北の亞細亞・歐羅巴等の廣漠として人間の住んで居らぬか、人口稀薄な土地を云うたもので、其欲界の諸天はアルガ河以西即ち歐羅巴であり、色界の諸天はアルガ河以東の北部亞細亞の極東

に至るまでの土地を謂ひ、無色界の諸天は北亞米利加のアラスカから南はコスタリカに至る間を謂つたものである。今參考の爲めに其等三界の諸天を地圖代用の表——方角に従つたものを作れば左の通りであるが、説明も翻譯の理由も其れは他日の機に譲つて置いて、此には略して置くが、諸天の名は盡く地名の對譯になつて居る。

#### 諸天表

——東は亞米利加より、中は亞細亞、西は歐羅巴に至る順序

□無色界の九天——(北亞米利加。北はアラスカより南はコスタリカに至る)——以下括弧内の原語は語源也。

空無邊處天——アラスカ(語源 Alaska)

識無邊處天——カナダ(Can, Canda)

無處有所——ルイジアナ(今の北米合衆國あたり、Luso)

悲想非々想——クバ島、總稱、アンチイレス群島(Cuda, Anti-III)

不廻心鈍(阿羅漢)——墨西哥(Mexico, Etheno, stein)

受陰區宇——グアテマラ(Gua demala)

受陰盡天——ポンヅラス(Pont-ureas)

想陰區宇——ニカラグア(Nego ara gua)

想陰盡天——コスタ・リカ(Costa rogo)

□色界の十八天(亞細亞。東はカムサツカより西はウラルに至る)

色究竟天——カムチャトカ(Kom, khateo, Skia)

善現天——マリチメ洲(Mare Time)



- 善見天——サガリン (Saga alin)
- 無熱天——ヤクトスク (Acut sk)
- 無煩天——スタノヂイ (Sanovoi)
- 無想天——オノン河地方 (A noun)
- 廣果天——イルクトスク (Hier kut sk)
- 福生天——エニセイスク (En nyse sk)
- 福受天——昔の葦里乞部 (メリキブ) 今のセーレンガ河地方 (Merikis—Mercury)
- 徧淨天——昔のイセード・スキチヤ (Is sedon Skythia)
- 無量淨天——イマウム (天山) 以東のスキチヤ (Skythia extra Innum)
- 少淨天——イマウム山以西のスキチヤ (Skythia Cis Innum)
- 光音天——オゾ河 (Opi)
- 無量光天——トボルスク (Top of sk)
- 少光天——オムスク (Omma sk)
- (西) 大梵天——ウラル・スク (Oura al sk) —— 天御中主 —— 高原
- (東) 梵輔天——ラ・オリエンタリス河 (Rha Orientalis ヲルガ河東支流)
- 梵衆天——ラ・オクシデンタリス河 (ヲルガ河西支流)

□欲界の六天——(歐羅巴)南部露西亞より西は獨逸に至る)

- 四天王天——スキタイ・レギイ (Skiythai Regii)
- 切利天——タウリヤ (Tauria)
- 他化自在天——ダキヤ・スキチヤ (Dace skythia)
- 樂變化天——ラエチ (アルプス東部 Raeti)
- 兜率陀天——昔の獨逸のスキエビ地方 (Suebi)
- 夜摩天——昔のヘルミオネス (獨逸 Hemioues)

以上は佛敎に謂うてある三十三天だが、勿論遠隔の天は中央から次第に發展して出來たもので、開闢當時の始めから在つたものでは勿論ない。今此に我等の目下の研究に關して參考となる諸天のみを聊か左に説明するならば、其等は須彌山の北の大梵天、梵輔天、梵衆天、四天王天、切利天、他化自在天、樂變化天、兜率天、夜摩天等である。

色界と欲界——こゝに色界欲界の名がある。其れは何であるか。色界とは目見るもの、空のもの。空即是色。地理ではスキチヤ、即ちシキ・チヤ「色」で、ウラル東部の北部亞細亞が其れである。西伯利亞の多くの地名には語尾に—スク又は—スカなどの語があるのは、色界のスク又は天のスクに基づいたものたることが知られる。欲界とは、自發して廣がる世界を意味し、前に言つたヲルガ河が、自發、欲望の元であり、其れから歐羅巴が Euryopia を語源として「遠く擴がる」を意味し、希臘の別語、及び羅典語で「欲」の語に當り、歐羅巴が欲界である。右の中、大梵天、梵輔天、梵衆天は色界の天であるが、他は欲界の天である。



**大梵天**(ウラル)——大元神、天御中主神を意味する大梵天は、前に説明した通りウラル山の名であることは説明を要せぬ。

**梵輔天**(ラオリ・エント河)——ウラル山の西にラルガ河があつて、昔はラ(Rha=Raana)河即ち梵天と謂ひ、其上流に二枝あつて、其東の枝をラ・オリエント河と云ひ、「オリエント」は東を意味するが又た「輔」を意味することは語源學者の異論ないことで、ラ・オリエント河は梵輔天であることも明確である。

**梵衆天**(ラ・オクシデンタル河)——右のラ河の西枝をラ・オクシデンタル河と謂ひ、「オクシデント」は羅典語 Oceanus を語源とし、「合衆」を意味し、此河が梵衆天たることも明確であり、且つ此二つの河、二つの名が見事東西、輔と衆と並んで在るなどは、愈々考證の明確を示めして居る。

**四天王天**(スキタイ・レギイ)——黒海の北岸から其西部一帯を昔は總稱してスキタイと謂ひ、今のクリミヤ半島の在る南方露西亞を、昔はスキタイ・レギイ Scythia Regii と云ひ、「レギイ」は王を意味し、其スキタイの語尾が -gion と發音されて、スキタイ・レギイは「シテン王天」である。

**切利天**(タウリヤ)——此シテン王天たるスキタイ・レギイと土地相接する西の方一帯をタウリヤ Tauria と謂ひ、切利天たることは説明を要せぬ。此タウリヤと前のスキタイ・レギイとは、土地相接して入り交つて居るから、近松の「曾我五人兄弟」の中に諸天を説明して「四王、切利は形を交へ」と言うて居る。

**他化自在天**(ダキヤ)——黒海の西の方、ダニュープ河の北部一帯を昔はダキヤ Dacia と謂うた、其語源は羅典語 Dacia=Dacia で此ダケの部分のスキタイ乃ち「好き自在」を意味する地を發音と意味とで他化自在天と謂うたのである。「ダケ」とは美しく飾り、頌美すること、近松は「他化自在天の妹背には顔と顔とを見るばかり」と云うて居る。

**樂變化天** ラエチヤ)——ダキヤから西伊太利東北部にラエチヤ Raetia の地がある。希臘語源 Rha, Rhadria 微笑しつつ、樂に容易に變化することを意味し、これが即ち樂變化天である。

**兜率陀天**(スエビ)——とはツシタ天 Tushita で語源は希臘語、英語兩系統の語で Tushita が Tushita となつたもので、「共に相一致し」「相引き」を意味し、獨逸の中央部、昔のスエビ Suebi の地が、之を對譯して即ち兜率天である。近松が「兜率天には手を取りかはし」と云うは此意味である。

**夜摩天**(獨逸即ヘルミオネス)——とは日本語山天である。是れは即ち獨逸の舊名ヘルミオネスで、ヘルメースの神の名である。此神の名の語幹ヘルマ Herma は山、柱、枕等を意味し、此神即ち月讀神は山を知ろしめす神で、夜摩は日本語の山である。近松が「夫婦枕の山天の契は抱き合ふと聞く」と云うて居るは、此ヘルミオネスの言葉の中に、山、枕の意味があり、又た其土地を同うせる、兜率天は手を取りかはし、相引き、抱き合ふを意味するからである。

**近松の説明**——近松が是等諸天を説明するに男女關係の戀を以てするのは、スキタイ即ち「好き」「色」「戀」の意味もあるからで、又た其説明にも面白い語源上の正當の理由があるから、参考の爲め「曾我五人兄弟」中の虎少將道行の段から拔萃をして置かう——

「虎少將は閨の戸の、白むまかせに起き出で……たしなみ強き空の色、空にも戀は有明の、欲海の四王、切利天。夫婦枕の山天の、契は抱き合ふと聞く。兜率天には手を取り交はし、樂變化天の戀衣、夫と妻とが忍ぶ夜は、互にニツト打笑ひ、笑めるを戀のしるしとは、其れが好いやら悪いやら、人界よりは知らねども、これで



堪能出来るとかや。他化自在天の妹背には、顔と顔とを見るばかり、——之を並べて四王、切利は形を交へ、山は抱き、と取り、樂笑み他化は相見る」と云うて居る。

### 佛教舊派の轉覆

——此通り諸天の地理的説明は甚だ明確である以上は、舊派の佛教學は全く無能となり、其地理學は根本的に轉覆されたものである。勿論である——釋迦教は印度で起つたものでなく、實はスキチヤが釋迦教の本源地で、其<sup>スキチヤ</sup>が釋迦の名となり、西部亞細亞から埃及に流入し、阿弗利加に擴まり、其れからは、波斯ベルチスタンから印度に流入したもので、舊派佛敎徒の説くが如く、梵敎及び佛敎の印度起原説然の至りと謂はねばならぬ。

以上の研究に由つて佛典の天に關する地理は殆ど明確を致したと信じ、又た之に由つて、日本古典の高天原の觀念を擴大して、我等の新研究の正確を傍證せしめ得たと信ずる。されば我等は次に又た我古典記事に立ち歸つて其研究を進めることにする——

## 八 神世七代と黒海四周の古代國名

### 第一代、國之常立神

(マルメニヤ)——國之常立神以下七代を、古事記は神世七代と言ひ、アルメニヤから西に向ひ、黒海の四周を一と廻りして、裏海の南岸までの間の古代の國名が順序正しく、神世七代の名になつて居て、其第一代の國之常立神の名が、アルメニヤの別譯である。

日本書紀は、天地剖判れ、天先づ成つて地後に定まり、然る後「神聖其中に生れます」と云うて居るが、アル・メ

ニヤの語源 Ar menos は「在・神聖」を意味する。又た「葦芽」の意味もある。此葦芽が化して神となつたのを國常立神と號すと云うてある所を見ると、アルメニヤなる名は其の葦芽であり、又其神靈である。そしてアル・メニヤの下半語の語源メノス (Menos) なる希臘語は神靈を意味し、又た其地に「立ち留まる」「永く立つ」を意味し、明に「國常立」の神の名であり、國の精神となり指導者となる意味の神名である。

### 第二代、豊雲野神

(タウロス山脈の南のコムマゲネ)——豊・雲野神は國常立神の南の地に其名が讀まれ、其れがタウロス山脈の南のコムマゲネのことである。

豊雲野と云々は、單に豊かに雲がある位の意味ほか無いが、尙ほ其語源に進んで研究すると、「雲」の羅典語には種々の意味がある。

此神には別名が非常に多い、即ち一名豊國主尊、豊組野尊、豊香節野尊、浮經野豊買尊、豊國野尊、豊雲野尊、葉木國野尊、國見野尊と云ふてあつて、是等別名の多くは雲の語源、語幹等が種々に發音されたものゝやうである。雲、又は雲野等の羅典語は Comies, 又は Communus で往來、交通、社交、國、組合、賣買、通商等を意味する所から、此神の名の如き色々の發音の別名があり、又た其様な國、組、商買等の意味の名がある。

此意味を以つて此神の土地を研究すると、小亞細亞南部のタウロス山脈の南のコムマゲネが其れである。(Taurus, Commagene) 此神に「豊」の名があるのはタウロス山脈が「豊」を意味するからである。又た「コムマゲネ」とは交通を行ひ、商業を行ふを意味する地名で、最も善く、此神の名に合うて居る。

此神の別名豊・香節野のカフスとは獨逸語の Kaufen 即ち日本語カフ(買ふ)である、其れ故に浮經野豊買尊の別名がある。其「浮經野」とは英語等の Exclaim(ing) の發音の變化に過ぎぬ、即ち交換を意味するのである。葉木國



野尊なる別名は、羅典語 *Pax, Pax* を語源として、平和、商業を意味する名である。又た豊野尊の名は羅典語 *Curo* 食、即ち「食ひ」で、又た「金錢を得ること」を意味する名である。現時のアレツボ州の東部が昔のコムマゲネの土地である。

**國狹槌神**（フリギヤ）——日本書紀では國常立神と、豊雲野神と、國狹槌の神とを開闢の三神として、其他の神は「一書に曰く」の中に入れて居る。又此國狹槌神は古事記の神世七代の中にはない神である。國常立神は小亞細亞の東部アルメニヤだが、今此國狹槌神の名は小亞細亞の西部のフリギヤに讀めるのである。フリギヤ *Phrygia* とは希臘語源 *Phrygia* で健康に育ててゐることを意味し、健康を羅典語で *Salvus* と云ふ所から考へて、國の「狹槌」の名は *Salvus* に當り、其「ル」音が消えてサツチとなつたものである。其れは猿田彦神の名が、又た狹田彦と書かれるに由つても、サルルの音が發音されることが知られる。そして國狹槌神を羅典語に直すと *Cor salus* の語となり、教育、補助、協議者、領事等を意味するのである。此神は古事記の神世七代の中には入れてない。

**「隱身」と姫氏、アマゾン族、スキチヤ族**——以上の神々は獨神で、隱身也とある。獨神成りましたとは、神話上又た歴史上果して何れ丈深い意味があるかは未だ詳にせぬ、獨立存在の神たることは其名義上明かである。然し、「隱身也」とのことは何であるか、從來の國學者等の説明は甚だ不明瞭で、たゞ「御身隠れて居て、視え玉はぬ神」と云うに過ぎぬ。或は是れは肉體の眼を以つて視る可からざる靈的の神であることを意味するやうであるが、「隱身也」の語は其意味の不可視とは解されぬやうである。何故ならば葦牙彦神の如きは葦芽の如きもの、化成で、明瞭に目に視るべき神と謂うても善いからである。思ふに此「隱身」なることは、歴史的に解釋して、是等の神は「姫氏」であることを意味するやうである。元來此

高加索地方は前に云うたイペリ即ち姫氏の國で、姫は「秘め」を意味し、乃ち「隱す」ことである。殊に此姫なる語の中には神秘、羞耻、抑遜、威儀、尊嚴等の意味があり、希臘語の *Aidos* に當り、英語の *Hide* 隠す、膚皮、及び *Hide* 陰府、地獄等の意味が出て来る言語である。又た前に云うたスキチヤの前半語「スキ」には天、日光、美觀 意味もあるが、又た英語 *Hide* 即ち膚、蔽ひ、隱すの意味もある。

さらば舊來の國學を以つてしては到底説明が出来なかつた「隱身也」とのことは、新研究に依れば是等の神々は姫氏であり「秘め氏」であり、又たスキチヤ種族、日種族、大和族、優美族、希臘族たることを言うたものとのことが明確にされたのである。古事記の「隱身也」を「御身を隠くし玉ひき」と訓ませるのは善くない、「隱り身にます」と訓むべきである。國狹槌神に就ては古事記にも、書紀にも、隱身か否かは書いてないが、人類學者の研究に據ると國狹槌即ちフリギヤ種族は希臘族らしいとのことで、希臘族は優美族、大和族であるから、此神も亦姫氏たる隱身の神と判斷して誤らぬこと、信ずる。

**第二代、宇比地邇神、須比智邇神**（パフラゴニヤ及びパラヒヤドレス）——から以下五代の神々は男女偶生である。宇比地邇神、妹、須比智邇神の地はアルメニヤから西の黒海岸の昔のパフラゴニヤ國と、ボントス國のパラヒヤドレスである。此二柱の神は日本書紀では泥土煮尊、沙比土煮尊と書いてあつて、泥や土や、沙などを意味する神の名のやうであり、舊解釋は稚土、沙泥土など、解して居るが、其れは發音語に支那字を無理に當て附けたから來た誤謬の解釋に過ぎぬ。

地理的材料や、外國の比較研究の材料たる舊約聖書創世記の文を比較して研究すると、「比地煮」なる語は「水」を意味する希臘語 *Hydrion* で其「宇」と「須」とは *Hydrion* 即ち「本原」、又は「天」と、*Hydrion* 即ち「伴なひ」、「隨



「ふ」を意する語とて、宇比地通とは「本原の水」、妹・須比地通とは「伴なふ水」を意味する神の名である。此二神に當る土地は、宇比地通神はパフラゴニヤ Paphlagonia で「本源の水」を意味し、須比地通は、其東にバラヒアドレス Par-Hadrus の山の名に遺つて居て、「伴ふ水」を意味するのである。現代では是等の土地は小亞細亞のカスタムニ州とトレビゾン州とに當つて居る。

**第四代、角杙神、活杙神**(ツニヤ及びビツニヤ)——角杙神、活杙神は、植物が芽を出して角々むことを謂うた神の名で、小亞細亞西北のツニヤと、ビツニヤとが、明瞭に其れである。ツニヤ (Thynia) とは角の地で、其源は Thyno 角又は である。ビツニヤ Bithynia とは「活角杙」を意味し何等説明は不用であると思ふ。以上の神々は小亞細亞の神々であるが、次の二對の神々の名は黒海の西岸、北岸の地名に讀める。

**第五代、意富斗能地神、大斗乃辨神**(ダニューブ及びアガツルシ)——に於て、我等の研究は今やダルダネル海峡を超えて、バルカン半島に行て居るのである。意富斗能地神と、大斗乃辨神とはダニューブ河流域と、其北の土地とを云うたものである。意富斗能地神——ダニューブ河はダヌビウス河と云ひ、ドナウ河と云ひ、又たダナウビウスと云ひ、其の正式の希臘語は Danubios であつて、其後半語ビオスは又た羅典では Vius となつて、「常に」「大に」を意味し、其前半語「ドネオ」は「ドノチ」となり、羅典では「ドナチ」となり、デノチ (Donotes, Donoti, 英語 Denote) となる語で、日本では其れが「ドノチ」となつて、「意富斗能地」は「大 Donoti」に當り、ダナウビウス河即ちダニューブ河の名に此神の名が存して居て、明かに讀むことが出来る。其神名の意義は常に「勝を動かすこと、名を付けること、名を唱へること」である。又た此の「ドナウ」なる語は羅典語でアゴ、アギト、アギツス (Ago, Agito, Agitus) と對譯

せられる語で、勝であり、アギトであり、秋津となり、秋田となる語で、蜻蛉なる語もこれであり、ドナウビオ (ヌ) の縮まつた發音は「ドンボ」即ち蜻蛉である。日本の國名秋津洲の名は此地から起つたので、神武天皇紀や、雄略天皇記の蜻蛉事件も皆此ダニューブ河流域の事であり、神武天皇が「此國は蜻蛉の聲哈せる如し」と云はれたトナメなる語は此の Donau の「ドナベ」となり、トナメと訛つたもので、蜻蛉が「常に口を動かす」こと即ち「唱へ」を云うたもので、舊解釋の如く「交尾」など、解しては誤つて居る。(現日本の秋田にも蜻蛉傳説がある。)

**大斗能辨神**——ダニューブ河の北部一帯を昔はアガツルシ (Agathysis = Aga tho-orsi) と云ひ「我が善しと認め」ることを意味し、これが大斗乃辨神の名である。大斗乃辨とは希臘語オ、トノエ (Auto noe) で「自ら善しと認める」ことを意味し、アガツルシの地名と全然同一意味の對譯になつて居る。此地は現時のワラキヤとモルダビヤとに當つて居る。

**第六代、面足神、惶根神**(タウリダ及び高加索)——の面足神は黒海の北、前のアガツルシの東の土地が面足神の名を負うて居る。足とは天地開闢して、其事物が次第に備はつて、人間の面、土地の面が足り整うことを表はす意味がある、即ち黒海の北岸の地はタウリダ (Taurida) と云ひ、「足る」ことを意味し、又たスキタイ・レギイ (Scythai Regii) と云うて「表面が美しく見える」ことを意味し、又たアラゾネス (Alazones) と云うて「凡て完く備はる」を意味し、是等の別名を綜合すれば明かに「面足る」の神の名を此所に讀むことが出来る。

**妹吾屋惶根神**——は又吾屋惶根尊、吾忌檣城尊、青檣城根尊、又た吾屋檣城尊とも云うてあるが、要するに我等が手紙の文言の終りに書く「あなかしこ」を意味し、物の終りに達したこと、完成したことを意味する名であつて、高加索の地が此神の名に當つて居る。



高加索 Caucasus の Cau は高慢・尊大、尊稱で、日本語のあゝ、おほ、アヤ等を意味し、吾屋の字が當て、ある。其下半語の Casia と惶根の Casikone との間には Cas の語が兩者に共通して居るのを注意せねばならぬ。そして此語は美しく完成することを意味し、其次の Cas と -ikone とは到達し、終に來たことを意味して高加索は、吾屋・惶根の神の名の小變化の對譯である。

人間の模範人高加索人——此通り渾沌の顔は開闢して面目が備はり、第六代の面足神と妹惶根神とに於て其完成を告げた、そして其れが高加索であるが、高加索人は人類種族の最も完全なもので、我祖先の神々は實に此高加索人であつたことは、我古典の此系圖で知ることが出来る。又此地の女性は、世界上最も美麗なもので、此後天照天照大御神も此地の女神であるなどは、實に後世子孫たる我等の大に興味を有する所である。

第七代

伊邪那岐神、伊邪那美神

(マザンダラン及びギラン)——は伊邪那岐、伊邪那美二神

で、人間の祖と謂はれる男女の神である。此二神の名は伊邪那岐は希臘、羅典日本語源的に Ikhana-ge で「種子を蒔く者」を意味し、伊邪那美は Ikhana-ami で「種子を收めるもの」を意味し、陰陽、男女の神、生殖の神である。謡曲「淡路」に此二神の名の意義を謂うて「種子をまく」「種子を收める」と云うて居るは最も善く當つて居る。此二神は惶根神の子に當る神である以上は、其地理も亦高加索近くであるとの見當は容易に付くことで、此地

方から東南・裏海の南岸が此二神の土地である。乃ち

伊邪那岐神の土地は今の波斯のマザンダラン (Mizandaran = Ma-zan-andaran) で、マは敬語、ザンはザナ即ち「邪那」種子、アンダは與へる、「上」を意味し、アランは土地を意味し、明かに之れが伊邪那岐の神の土地である。妹・伊邪那美神の土地は、マザンダランの西、今のギラン、昔のゲライ、羅典語源ケロー (Gilan, Gelai, Calo)

で「收める」即ち種子を收めるを意味する地で、これが女神の土地たることが知れる。

日本人の生活状態を知つて居る西洋人の旅行者で、日本人の村落と同様な村落がマザンダランとギラン地方とに今も現に存して居ることを發表した者がある新聞を、我輩は嘗て見たことがある。芽原華山君も、嘗て小亞細亞を旅行して、日本と同様の風俗が其地方に少くないことを發表したこともあつて、其れには十分理由がある。我輩の神代に關する新研究の地理の誤つて居らぬことを傍證するものと云うても善い。

高天原總覽

——以上天地開闢よりして、高天原に成りませる神々と、其土地とを明かにした。我古典の所謂高天原とは右の神々の土地を謂うたものと見て、其範圍を略極めることが出来る。今以上に説いた所を表にするならば——

- 天之御中主神——ウラル
- 黑海北岸 高御産靈神——スキチヤ
- 神産靈神——ダキヤ
- 葦牙彦舅神——アシカニヤ
- 高加索 天常立神——アマゾン國、イベリ、姫氏國
- 國之常立神——アルメニヤ
- 豐雲野神——コムマゲネ
- 國狹植神——フリギヤ
- 小亞細亞 宇比地邇神——パフラゴニヤ

別天神五代



〔須比智邇神——バラヒヤドレス〕

角 杙 神——ツニヤ

活 杙 神——ビツニヤ

意富斗能地神——グニユーブ地方

黒海西岸、北岸

大斗乃辨神——アガツルシ

面 足 神——タウリヤ(スキタイ・レギイ)

惶 根 神——高加索

裏海南岸

伊邪那岐神——マザンダラン

伊邪那美神——ギラン

神世七代

で、是等は高天原の神であり、其國であるとすれば、高天原は要するに、黒海の四周で、小亞細亞全部と裏海の南方とを含めた範圍として置けば善いと思はれる。

### 九 神世七代と、舊約書の創世七日との比較

古事記の天地開闢記事と、最も同じなのは耶蘇教の舊約書、創世記の其れである。日本と猶太との古典ほど同じことを載せて居る書物は、世界眞に無二である。

舊約書の天地開闢七日説——一見すると舊約書の天地開闢説と、日本の其れとは殆ど縁が無いやうだが、若し新研究を進めると、兩者全然同じもので、殊に古事記の其れはさうである。舊約書の開闢記は創造

七日として居り、古事記では之を神代七世と云うて居つて、其七の数の同じことが、先づ第一の着眼である。今舊約書の大要から始めると——

第一日——神天地を造り玉へり、地は定形なく曠しく黒暗淵の面にあり、神の靈水の面を覆ひたり。神光あれ、と言ひ玉へば光ありき。光を晝と名付け、暗を夜と名付け玉へり。

第二日——神言ひ玉ひけるは……蒼穹の上の水と其下の水とを別ち、蒼穹を天と名付け玉へり。

第三日——神言ひ玉ひけるは……天の下の水は一所に集まり之を海と名付け、乾ける土顯る、之を地と名付け玉ひ、之を善しと觀玉へり。

神言ひ玉ひけるは——地は青草と實を生ずる草と、核をもつ樹とを出せり。神之を善しと觀玉へり。

第四日——神言ひ玉ひけるは……天の蒼穹に光明ありて、晝と夜とを別ち、天象と、時節と、日と、年との爲めにし、地を照らす光となし、日と月と星とを作り、晝と夜と光と暗とを司らしむ。神之を善しと觀玉へり。

第五日——神言ひ玉ひけるは……水には生物を生じ、鳥は天の蒼穹の面に地に地上に飛ばしめ、又た巨なる魚と水に生ずる諸の生物を造り、之を善しと觀玉ひ、生めよ殖えよと祝し玉へり。

第六日——神言ひ玉ひけるは……地は生物と、家畜と、昆虫と、獸とを其類に従つて出し、神之を善しと觀玉へり。

第七日——此くて天地及び其衆群悉く成りぬ。七日目に神其工を竣へて安息みたまへり。

○○○——神言ひ玉ひけるは……人を男女に造り、凡ての生物を治めしむ。神其造りたる諸の物を視たまひけるに甚だ善かりき。



と云うてある。

批評す——是等の創世を七日に配當したのは善いが、其配當には誤りが少くない。先づ第一日に光あり晝夜があつて、第四日にも光や日月や星やが出来て居るなどは重復であつて、第四日は不要の日のやうである。又た第三日に海陸が出来て、陸には草木が出来たが、海には魚類も何も造られず、次の中一日置いて第五日に水生と飛空動物が造られたなどは、神の業としては餘りに秩序が無さ過ぎる。

第四日には前日の海陸の動物を造る工事を半途で中止して、光とか日月とか星とかを造るが如き、勞力の繼續經濟を知らぬものと謂はねばならぬ。實はこれは、文句の入れ所が間違つたので、第三日に「神言ひ給ひけるは……善と觀給へり」で一段切れて、第二段に再び「神言ひ給ひけるは……善と觀給へり」とある此文句は、實は第五日の始めに加ふべきものと思はれる。

又た第六日にも「神言ひ給ひけるは……善と觀給へり」が二つあつて、第二段の人を造る話は、實は之を繰り下げて第七日の事とし、其れを人間が記念し——誕生日を記念して休息するとするやう解釋したが當然で、聖書の此點は誤つて居る、けれども其れ等は其れとして置いて、今兩古典を比較して見ると、又た甚だ有益な結果が出る。

### 七代と七日との比較研究——創世記第一日に「地は定形なく、曠しく黑暗淵の面にあり云々」の

語は古事記の「國稚く浮脂の如くにして水母なす漂へる時云々」の語と同じである。「神の靈水の面を覆へり」の語は、古事記の宇麻志・阿斯訶備・比古遲神の名の意義に當つて居る。

創世記各日とも、其始に必ず「神言ひ給ひけるは」とあるが、是れは古事記の始にある天の御中主神——之れが

「神」であつて、其次の高御產巢日神、神產巢日神が「言ひ玉ふ」を意味する神名である。此神は別名を神漏伎命、神漏美命と謂ひ、希臘語 Kalli-logoi (Logos), Kalli-ope, に當り、美しい言葉、美しい聲を意味し、神が「言ひ玉ひけるは」の語に當つて居る。

創世記の「神光あれと云ひ玉へば」の語は古事記第一代「國常立神」の名である。「國常立」とは羅典語 *Communis* の發音變化で、其語幹たる *due* (*Duce = Ducit*) は導くを意味し、月(ツキ)を意味し、又た光を意味する。語である。其れ故に「光」と「國常立」とは同じ意味であつて、此日は七曜中の第一日、月曜日である。

第二日に蒼穹上下の水を別けたことは、古事記の豊雲野神の名で、此神の名の語源は羅典語 *Theo-Cunnu* (*Theo-Communis = Common* 上下、交通、雲)即ち雨、水の上下交通性を云うた神の名である。然し創世記には、第二日は蒼穹の上の方を、天と名附けたとあるが、其下の方のものには命名を翌日まで延期した如き不合理がある。此日は火曜日蓋古事記系の記事に據つて、雲の上騰するは火の力に由るとのことに基づいたものであらう。

第三日に、天の下の水の一所に集つたものを海とし、乾いた土地に陸と名が附いたが、古事記は第三代には宇比地邇、須比智邇の二柱の神の名があつて、宇比地邇とは「上の水」、須比智邇とは「凡の水集る」を意味して、創世記が不合理に二日に跨げて命名したのを、古事記では一日即ち一代の中に相對せしめて命名してある。此日の水曜日たることは明瞭である。

第四日に光や、晝夜や、日月を造つたことは、第一日と重複した誤謬のことは前に言うたが、古事記は此に角杙神、活、神の名を擧げて居る。角杙とは草木の芽の角の如く出ることの形様を名付けたもので、創世記が、誤つて第三日の中に入れてある草木の創造は之に當つて居る。活關とは凡て水でも陸でも生物の發生を云うたも



ので、創世記の第五、第六兩日に亘つた創造事業を合理的に一と纏めにしたものである。草木發生の此日を木曜日と云ふも理由は明瞭である。

今若し創世記の不順序を正し、重複を取り去つて、創造事業を整理すると、創世記の第四日と第六日とは不要の日となつて、曠日が出ることになり、其れに第七日も休業とすれば一週三日不要の日、働かぬ日が出て、餘りに神はサボタージュを多く爲し過ぎることになる。

第五日は、右の如く不要の日になるが、古事記では神世第五代の神の名は意富斗能地神と、大斗能辨神とであつて、前者は「大に名付く」を意味し、「神名付け玉へり」の語に當つて居る。後者は希臘語「自ら善とす」を意味し「神善と觀玉へり」の語に當つて居る。創世記でも實は此事業は第五日であらねばならぬのを、第五日には誤つて他の事業が配當してあつて、古事記の方が正しいのである。

何故ならば此日は金曜日に當るので、「金」は Cane, Cannon であり、鐘であり、規則であり、鐘は英語ベル、日本語ペロ即ち舌であり、規則、言葉、命名、是認の意味があつて、神世第五代とも一致して居るからである。英語で Friday と謂ふ其フライとは自由、己が好みを意味し、自ら名付け、自ら善と觀るの意味であるから、第五日は矢張古事記の方が正當であることが知られる。

第六日には神は凡の物を造り、亦人を造つて、之を「視たまひけるに、甚だ善かりき」とあるが古事記の第六代游母陀琉の神と阿夜詞志古泥神との名になつて居る。游母陀琉とは「面足」「凡て足る」を意味するから、創世記の此部分に一致して居るが、創世記は第七日の部に「かく天地及び其群衆悉く成りぬ」と大成のことを言つて居るが、これは實は第六日の尾に書くべき句で、古事記の阿夜詞志古泥の神の名に當つて居る。此阿夜・詞志古

泥は「おな・かしこ」天尾大成を意味する名稱である。此日は土曜日英語の Saturday で、Sat は羅典語 Saturn と同語で、満足を意味し、創世記も古事記も一致して居る。

第七日——創世記は、第六日に人間が出来て、第七日は神のサボタージュの日となつて居るが、其れは間違で、古事記は伊邪那伎、伊邪那美二神の成りましたことが書いてあつて、是れが正當である。日曜日 Sun-day, Son-day で、伊邪那伎、伊邪那美二神の名の語源は *Sau-agi, San-ami* で、其語幹たる中央の *Sau* は *Sun* と同じく、又た *Son* と *Sun* と同じく、太陽即ち日であり、又た兒(サン)でもあり、又た種(サネ)でもあつて、人の種を意味し、前者イサナキは人種を蒔く者、後者イサナミ人種を保育する者を意味し、人間の祖たると同時に、太陽の祖たることは此二神から日神天照大御神が生れ玉うたに據つても知ることが出来る。

されば第七日は、創世記は明瞭に誤つて居て、古事記は明瞭に正しい。其れのみならず東洋では古來此第七日を「人日」と謂うて居て、此日に始めて人が造られたことになつて居る。第七日は安息日だが、人間が生れるにもせよ必ず誕生日を祝ひ之を記念するもので、其翌日を祝うことはない。然るに創世記は此事を誤つて第七日を無意味な翌日として居る。

假令創世記には甚だ此等の點に就いて誤謬があるにもせよ、兩者の天地開闢記は全く同じものであることは明瞭に謂ふべきである。そして古事記は世界的古典の大位置の證明を得、舊約書は古事記に由つて其誤謬を訂正され、又た其地理關係は前に説明した通りであつて、愈々日本古典の新研究は、大々的に發展することになるのである。



## 一〇 莊子の渾沌氏の顔の七竅神話及び結論

天地開闢と、高天原研究の證明とを全うするには、我等は莊子「應帝王」篇の「渾沌」寓言を擧げねばならぬ。其文は――

「南海の帝を儵となし、北海の帝を忽となし、中央の帝を渾沌と爲す。儵と忽と時に相與に渾沌の地に遇へり。渾沌之を待つこと甚だ善し。渾と忽と渾沌の徳に報ひんと謀つて曰く「人皆七竅(アナ)ありて、以つて視聽食息す、此れ(渾沌)獨り有ることなし、嘗みに之を鑿たん」と。日に一竅を鑿る。七日にして渾沌死す」と。之は天地開闢を言うたもので、此に七日で渾沌は死んだと云うのは、天地開闢成つたことである。日本古典の神代七代、耶麻創世記の七日、其「七」に於て三者全く同じなのは甚だ面白い。けれども此に所謂南海の帝、北海の帝、中央の帝とは果して何であるか――地圖を見たら、直ぐ問題は解決される。即北はパルチク海、南は波斯海で、中央を黒海とした地理小説である。

**南海の帝「儵」**(波斯海)――南海の帝「儵」とは急行移動を意味し、太古の南海たる波斯海が其れである。「波斯」とは希臘神話のベルシウスの國で其名を負ひ、語源は *Parasus* 急行突進を意味し、其後半語シウスは即ち「儵」の語であるとしてベルシウスには波斯方面即ち南海から、北海の方へ突進急行した神話がある。

**北海の帝「忽」**(パルチク海)――「忽」とは「たちまち」、急に突進し、迅速に行き去ることを意味し、北歐のパルチク海が、北海の帝たる忽のことである。パルチク海は、昔はコダ・ヌス(Cothanus)の海と謂うた、コダヌスのコダとはゴツ。即ちゴツ「忽」の變化(Coda=Cothanus)で迅速に飛び行くこと、又た「言葉」を意味するゴツの語

には又た鋭く突るが意味あるから、ゴチクの建築は尖つた屋根を有つて居る。日本語尖つた、角ばつた物を形容して「ゴツ／＼」と云うは此源語であらう。速取り寫眞器をコダツクと云ふも此ゴツの語源である。北海にゴツト・ランドの島がある。これもゴツと同語の名である。其南の海岸に昔の人種コーテン、又たグートネンなるものも居た。

此ゴツは希臘神話のベルシウス即ち我が須佐之男命の別名で須佐の國は前に言ふた波斯であり、彼れが突進して南海から北海へ、其れから北亞米利加へ渡つた時の其名である。日本で之を「牛頭天王」と云うて居る。牛頭は「忽」である。

此海を又たスエキクムの海とも云ふが、これも燕のやうに急速に過き行くことを意味し、「忽」と同じである。現代の名をパルチク海と云うが、これも希臘語忽然、突進を意味して「忽」の別譯である。此海の東岸のフィンランドも、跳ね飛ぶことを意味し、又たスオミ(Suomi=Soumai)と云うのも同じ意味である。

**中央の帝「渾沌」**――前に謂うた、面足、惶根の神の地、即ち黒海の沿岸が中央渾沌の土地である。「渾沌」を希臘語 *Khao* (Chaos) カホと謂ひ、日本語「顔」の語源である。それだから、我古典は「面」足と謂ひ、莊子は人間の顔面の七竅を謂うて居る。

**好遇**(黒海―ヨウクシノス海)――渾沌が儵と忽とを善く遇したとのことは、南海と北海との中間、黒海の別名ヨウクシノス(Euxinos)の海の名が其れで「外來者好遇」を意味するのである。

莊子の此愉快な比喩的説明は、簡単に、又た系統的に、天地開闢地理を説明したもので、苟も語學を知り、古代地理を知る者に在つては、何等の異論なく、直に承認されるであらう。莊子には其他にも尙ほ重大の地理神話



「大鵬圖南」がある。

以上天地開關・人類始原説及び其地理に關しては、東西世界に傳はる大傳説や、大古典は全く之を引用して、比較的、語源的に、地理的に——最高等の學術的に之を研究し、其凡の歸一を發見し、其地理を明かにし、之をウラル附近黒海四周の地だと明確にして、誤らざる斷案を下した。何人か此斷案に反對し得るものぞ天下無敵たることを斷言する。

かの天を以つて大和のことだとか、九州にあつたとかなど、の解釋を下す所の、井底の蛙輩の小眼界は、實に一笑に値する又は須彌山や天を印度であるとするが如き佛學者やら、サンスクリット學者等は、吾等は餘りに其無識に驚かざるを得ない。

**日本歴史の出立點は、此通りウラル、黒海附近と明確にされた以上は、是より後々に續づく日本の歴史地理は、又た此世界的地點より出發せねばならぬは當然で**

伊邪那伎、伊邪那美二神の天降り地理は如何ん。

オノコロ島は何處であるか。

二神の國生み、神生み地理は如何ん。

天照大神御神の高天原地理は如何ん。

其高天原と出雲——天孫降臨地は如何ん。

大國主神の比較研究——其出雲の國は如何ん。

等の、開關に續づく日本太古史の世界的研究の用意がなければならぬ。

男女二神が、ウラル、高加索方面から、亞細亞に陸續せる其等の廣大なる土地を一瞥だにせず、極東の小さな島國に、一躍して、其所にオノコロ島を發見し、小さな島々を先づ第一に生み玉うたとは、如何にしても常識では考へられぬ。

神の事業には順序がある。人類の文化にも傳播の道があつて、中央から順次に遠くに傳はるのである。さらばウラル高加索の高天原方面に起原した日本民族、及び其歴史は、當然此地方から、地理的順序を以つて發展して行くもので、舊派の史學家や、國學者等は、全然從來の研究法を棄て、新研究の足跡を履んで、新に此地點から出發して、全然研究を新に起こさねばなるまゝ。

尙ほ天照大御神に關しての高天原・須佐之男命、天孫降臨と出雲關係の高天原に就ての研究は、此後に詳細に發表して、益々我等の高天原斷案の正確に證明を加へることにする。

天地開關に續づく歴史は、男女二神の「國生み、神生み」で、オノコロ島（ベルチスタン）の歴史地理から始まるのである。

## 天地開關と高天原 終



研究餘録

木村鷹太郎

小生の研究日誌

大正十一年一月

四日 織田信長と今川義元との桶狭間合戦は印度ブラマブトラ河上流の河神話なることを知る。

十日 日本書紀の天文星座「日の鏡」はクラテル(瓶泉)星座で、印度デツカンのハイデラ・バードのゴダワリ川と、キシトナ川との間の土地を形とせしもの。日本では此日の鏡は日前(ヒノタマ)の鏡と云うてあるもの。佛典では龍樹の地に當り、亞拉比亞夜話の漁夫と化物との土地であり、其化物は日本に所謂「のくま入道」なるもの。又た漁夫が網で引き上げた真鍮鏡は此日の鏡に當つて居る又た平家物語の「劍の巻」の中にある、日の鏡の蓋を開けたら雲が出たとの話は、此亞拉比亞夜話と同じものである。

九日 『佛の附法三十三祖』を研究し、其傳統は波斯の迦葉、アナミスの阿難、ベルテスタンの商那和修、

其れから印度西岸のヘルブダ河印度河、西藏、アスマム等を経て印度に入り込む地理を謂うたものたることを知つた。達摩は決して支那へは入つて居らぬ。彼の少林寺は緬甸のアラカンである。だから支那には達摩の遺跡は漠然たるものである。

二月四日 佛典の阿難と、摩訶女と、波提提との地は波斯アナミスの地、現名ミナウ及び其附近の地の地理小説たることを知つた。詳細に研究した。(首楞嚴經の地)

五日 天文星座「ゲートス」は海の怪獣とか、又た鯨かと云はれて居るが、是れは秦の始皇が海上で射たと謂う「高大魚(ゲートスの譯)なるもので、恒河口を首とし、ベンガル灣全部を形にしたもの。始皇帝の秦は支那でなく、印度であることも明瞭である。

六日 日本書紀允恭天皇以後の三韓なるものは、印度のデツカン半島の南部の西海岸で、コンカンが百済コーチンが高麗、トラバンコレーが新羅、カルナチツクが任那であることが明知せられ、詳細の地名を書き込んで地圖を作ることが出来た。

七日 浦島の生地丹波の筒川とは印度ブラマ・ブートラ河下流ヤムナ川口のこと、其所に日本に瓜生島(大分古地圖)として傳はつて居る島がある。其れが浦

御芳志を感謝します

印刷費中へ、左の諸氏より御寄附を辱うしました。

- 謹んで御禮申上げます(拜受順)
- 一金十圓 樺太 武藤 信平氏
- 一金十圓 東京 S T氏
- 一金十圓 東京 尾崎榮太郎氏
- 一金十圓 大阪 宇野源三郎氏
- 一金五圓 千葉 長澤 子妙氏
- 一金十二圓 横濱 高橋 康正氏
- 一金十圓 山梨 萩原晋之助氏

會 報

新入會員

- 横濱市 安居院祐享氏
- 東京糺町 吉田 敬次氏
- 赤坂區 奥田正太郎氏

島のこと、此傳説は此河口のものたることが知れた。又た浦島は希臘神話で、龜に化つたグラウコスなるものに當つて居る。其龍宮は錫蘭島である。

十三日 『釋迦下山と成道の菩提樹』論を中央佛教に送る。パピロニアのヨウフラテス河口のブチアン島が菩提樹であることを證明して置いた(釋迦非印度説の一部)。

十七日 優爲(ウルヴィルツ)迦葉と、ウル村(村をヴィラと云ひヴィルツは其變化)のアブラハムと同一人物である、二人共に拜火教信者たることが知れた。(以上二月末まで)



●日本民族研究叢書既刊  
及び續刊目次の一部

- 仁德帝の埃及難波(既刊)(品切れ)
- 高天原(既刊)(品切れ)
- 神武帝の久米歌は緬甸歌(既刊)
- 日本民族東漸史(既刊)(品切れ)
- 當世の國——何處?(既刊)(品切れ)
- モリス、ユトピヤ國は日本津輕(既刊)
- 日本民族祖先の雄圖(上下既刊)(合本あり)
- 爲朝とタメルラン(上中下)(既刊)
- 日本が世界に與へし「世界平和の理想」(既刊)
- 世界の三大宴會(既刊)
- 日本建國と天照大御神(既刊)
- 世界統一の天照大御神(既刊)
- 神夏磯姫とアビシニヤ
- 「屈原」楚辭」の新研究(太古世界一周の書)
- 「御曹子島渡り」(印度、阿弗利加關係)
- 國生み神生み地理
- 聖德太子の「夢殿」研究(西伯利亞、沿海州)
- 「謡曲」の世界的研究
- 太古バルカン、希臘に於ける日本民族
- 百人一首は印度代表地理歌
- 源氏物語は印度の地理小説
- アリストトレレスと山鹿素行
- 日本、支那、西洋の文字及び言語の同系
- 太古亞米利加發見者は日本民族
- 其他研究發表無限——續々刊行す

日本民族協會主意書

(尚ほ、この主意書  
會則引用の御方は  
御一報下さい)

■日本舊來の歴史は、根本的に誤つて居る。其年表は人爲虚構である。日本の小、中、大學等で國民を教育して居る日本歴史はウソ歴史に過ぎぬ。而も民族祖先の大世界的のものを極東の小島國に縮め込んだ縮小歴史である。

■我等の-new研究に據ると、日本民族は西亞東歐の中間、ウラル、高加索、バルカン地方に起原し、之れが高天原である。其れから歴史の舞臺は東西南北、四大海、五大洲に擴まつたもので、日本古典は、一として此日本島のものはなく、皆印度以西の世界的大々日本時代のものである。

■そして民族太古史の中心は、長年月の間に小亞細亞、バビロニヤ、波斯、希臘、カルタゴ、モロッコ、セネガル、埃及等と幾變遷して、其後印度に來て此地に長く留まり、北は滿、蒙、西伯利亞に、東は太平洋、大洋洲、南北亞米利加にも民族關係を有し最後に此極東の日本島國に落ち付き、民族祖先の世界的大歴史と其地理とを、縮めたり、削つたりして、箱庭式に此小島國に

次巻豫告

偉大不思議の 繼體天皇

定價(會費)壹圓 (但會員外は一圓二十錢、内國送料不要、外國は送料を申受けます)

大正十一年三月二十二日印刷

著者 東京市外。戸塚町諏訪一七九番地 木村 鷹 太郎  
 東京市神田區三崎町二丁目三番地 尾崎 榮 太郎  
 東京市神田區三崎町二丁目三番地 井波 修 次郎  
 東京市神田區三崎町二丁目三番地 印刷所 同 工 社 郎

發行所

東京市外。戸塚町諏訪一七九番地  
 日本民族協會  
 振替口座東京六九七〇番

寫し付け、是れに「現島國日本」の近古史以下を結び着けたのが、今までの所謂日本歴史なるものである。

■是れに氣附いた我等は、最高等の學術的研究法と、世界的博大なる研究材料とに依つて、舊派史學を根本的に破壊し、紛碎し、然る後之を本來の世界的大々日本民族史に還へさうとするもので、我等の研究と努力とは、實に日本唯一 又た世界獨歩である。

■此目的の爲めに本會は毎月一回「日本民族研究叢書」を發行して會員に配布する者である。苟も舊來のウソ歴史、縮小歴史に満足せず進んで日本歴史の真相を明かにし又た我が古典の學術的眞解釋を得、以つて大乗的の日本國體の觀念に達せんとする人々は、願くは來つて我會の精神と事業とに大賛成を與へられんことを。

■以上の主意精神を賛成し又た研究する者は會員たることを得。會員、會費左の如し。

普通會員	毎月一圓	十ヶ月十圓
特別會員	毎月五圓	十ヶ月五十圓
特別贊助會員	毎月十圓	十ヶ月百圓





IF 7G-73

( 15 )

**The Monthly Pamphlet of Japanology—**

—Grounded upon the new investigation of the Japanese, as a race which originated in Armenia, Asia Minor; and expanded and migrated westward, and eastward, and at last settled in the present island Japan.

BY

**T. KIMURA**

**AUTHOR OF—** 'The Antique History of Japan—or the Japanese as a Greco—Latino—Egyptian Race' in two volumes; 'The History of Oriental Ethics'; 'Shakespear's Hamlet, a mere Compilation of the Oriental materials'; 'The Greek and Roman Myths'; 'The Christianity investigated Japanically'; etc.  
**TRANSLATOR OF—** 'The Dialogues of Plato' in five volumes; Xenophon's 'Memorabilia'; 'Aristoteles' 'Politics'; Byron's 'Corsair'; 'Cain'; 'Mazeppa' 'Manfred'; 'Zend-Avesta' etc.

**CONTENTS.**

THE JAPANESE COSMOGONY, AND THE "TAKAMA-NO-HARA":  
THE ABODE OF THE HEAVENLY GODS.

- Introduction—The idea of "Takama-no-hara" the Heaven.
1. The Cosmogonies, studied comparatively.
  2. The result of comparison, and the identities found.
  3. The Cosmogonical geography.
  - 5—7. The five special Gods of Heaven.—the Gods of the Ural, the Skythia, and the Asia Minor.....13—25
  8. The Seven Regions or Dynasties of the Japanese Cosmogonical Gods:—the Gods of the Asia Minor, the Balkan Peninsula, the South Russia, the Caucasus, and the Mazandaran.....25—33
  9. The Identities found, between the Seven dynasties of the Japanese Cosmogonical Gods, and the seven days of Genesis of the Old Testament.....31
  10. A Fable of the Face of the God "Chaos", and the death of him after seven days;— Conclusion .....39

THE NIPPON MINZOKU-KYŌKWAİ

179, Suwa, Totuka-mati, Tokyo, Japan.

Price, 1 Yen.

終